

医薬品適正使用の推進を見据えた 家庭動物の医薬品管理・服薬状況に関する調査

Survey on drug management and medication compliance
for companion animals with a view to promoting appropriate drug use

東北医科薬科大学 薬学部 臨床薬剤学教室
金野 太亮、鈴木 裕之、中村 仁、村井 ユリ子
Taisuke Konno, Hiroyuki Suzuki, Hitoshi Nakamura, Yuriko Murai
Tohoku Medical and Pharmaceutical University

キーワード：伴侶動物、医薬品管理、薬剤師、獣医療薬学、ファーマシューティカルケア
keywords : companion animals, drug management, pharmacist, veterinary pharmacy, pharmaceutical care

1. 研究背景と目的

近年、伴侶動物の家族化と長寿命化に伴い、高度な獣医療を求める社会的ニーズが高まっている¹⁾。この機運の高まりに応じて、愛玩動物看護師の国家資格化²⁾や動物病院専門薬局の開設³⁾など、家庭動物の医薬品を取り巻く環境は劇的に変化している。適切な医薬品管理・使用は家庭動物の健康管理をする上で必須である。諸外国では家庭における不適切な医薬品管理・使用による家庭動物や子供の誤飲⁴⁾、医薬品曝露による健康被害や環境汚染⁵⁾等について指摘されているが、本邦における知見は極めて少なく、日本の飼育環境から生じる特有の潜在的リスクが存在する可能性もある。日本の薬剤師と獣医療スタッフのチーム獣医療は伴侶動物の治療の質を向上させる可能性がある⁶⁾ものの、薬剤師が家庭動物の医療に介入・関与した報告はほとんどなく、家庭での医薬品管理と投与の実態は不透明である。そこで、本研究では家庭動物の医薬品管理、使用実態を明らかにすることを目的として、アンケート調査を実施した。

2. 調査方法

対象は研究協力先の動物病院3施設の来院者、調査期間は2024年4月1日～7月31日とした。QRコードを付与した説明・同意文書を配布し、読み取ったQRコードの遷移先であるGoogle Formsを用いた無記名オンライン回答とし、回

答をもって同意とした。調査項目は、研究参加の同意取得、回答者の基本情報、家庭動物に関する情報、家庭における医薬品の保管・管理状

表1 調査項目一覧

No.	質問項目	質問数
1	研究参加の同意取得	1
2	回答者の基本情報	6
	1) 性別	
	2) 居住エリア	
	3) 回答者年齢	
	4) 家族構成	
	5) 主たる飼育者	
	6) 該当医薬品の使用者 (内服の糖尿病治療薬・抗がん薬) または認知症罹患の有無	
3	家庭動物に関する情報	6
	1) 飼育する動物種と頭数	
	2) 主な飼育場所	
	3) 定期通院の有無 (通院有の場合、その施設数)	
	4) 処方頻度と処方数	
	5) ペット用お薬手帳や医薬品情報提供文書配布状況	
	6) ペット用市販薬の購入・使用状況	
4	家庭における医薬品の保管・管理状況	9
	1) 使用医薬品の総数	
	2) 使用中医薬品の名称や用法用量の判別の可否	
	3) ペット用医薬品の保管場所	
	4) 人間用医薬品の保管場所	
	5) 医薬品使用に関する理解度	
	6) 残薬数	
	7) 投与前の事前調製等の有無	
	8) 医薬品の誤飲経験の有無	
	9) 人向けに処方された医薬品をペットに使用した経験の有無	
5	医薬品使用・保管時の課題と薬剤師・薬局へのニーズ	3
	1) 家庭動物の服薬に関して困っていることや疑問に感じる点	
	2) 家庭動物の医薬品管理に関して困っていることや疑問に感じる点	
	3) 家庭動物の医薬品を適切に管理・使用するために薬剤師や地域の薬局に期待すること、依頼したいこと	
6	自由記述欄	-
計		25

況、医薬品使用・保管時の課題と薬剤師・薬局へのニーズ、自由記述欄とした(表1)。質問数は全25問とした。本研究は東北医科薬科大学倫理審査委員会の承認(課題番号:2023-0-040)を得て実施した。

3. 結果および考察

飼い主 2862 名に調査票を配布し 191 名から回答を得た(回収率 6.7%)。

3.1 家庭における医薬品管理状況

保管場所は台所ラック内が 47 名(24.6%)で最多であった(図1)。誤飲または誤飲未遂が 11

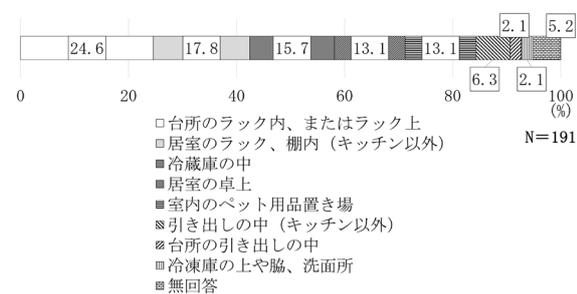


図1 ペット用医薬品の保管場所

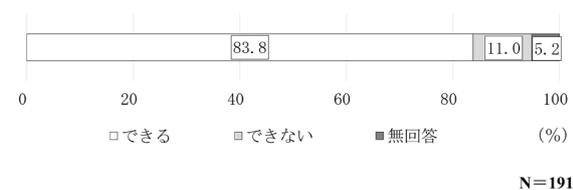


図2 医薬品名の判別・用法用量の確認の可否



図3a ペット用医薬品の残薬数

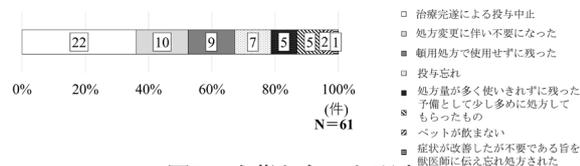


図3b 残薬となった理由

表2 剤形ごとの残薬数一覧

剤形	数量(単位)	1種類	2種類	3種類	4種類	合計(件)
錠剤	<10(錠)	15	13	7	0	54
	10~20(錠)	2	2	4	4	
	21~30(錠)	3	0	2	0	
	31≤(錠)	0	0	0	2	
散剤	<10(包)	3	0	1	0	17
	10~20(包)	3	1	0	0	
	21~30(包)	1	0	0	0	
	31≤(包)	1	0	3	4	
外用剤	1(本、個)	6	1	1	2	16
	2(本、個)	2	3	0	0	
	3≤(本、個)	1	0	0	0	
注射・輸液剤	(本、袋)	6	0	1	0	7

名(5.8%)認められた。保管時に医薬品名や用法用量が確認できない事例は21名(11.0%)であった(図2)。残薬は1-3種類でいずれも30錠未満であった(図3a、表2)。医薬品の保管状況は概ね適切で残薬も少ないことから、これら2点に関する問題は深刻ではないと考えられた。また、一部で冷蔵庫上やラックの上など、不適切な保管場所もみられた。しかし、ペットの医薬品誤飲の主な原因は、ペットがこれらの医薬品保管場所に直接アクセスすることで誤飲が生じるわけではなく、飼い主が自身の医薬品を服用する時に誤って薬を落とすなどの不注意によって生じる可能性が高いことが示唆された。これにより、飼い主に対する適切な薬学的助言や啓発活動は、医薬品誤飲リスクの低減につながるものとする。

3.2 与薬時の課題

約4割の飼い主が与薬に困難を感じており、「食べ物と一緒に薬をあげても薬だけ吐き出してしまう」、「苦味があると飲ませるのが難しい」などの問題が多く報告された(表3)。

表3 家庭動物の与薬について困っていること

内容	回答数(件)	割合(%)
なし	107	38.1
食べ物と一緒にあげても薬だけを吐き出してしまふ	37	13.2
薬を混ぜた食べ物を食べ残してしまう	29	10.3
苦みなどがあると飲ませるのが大変である	23	8.2
薬を混ぜたことがわかると、何も食べなくなる	17	6.0
仕事等の都合と投薬時間との調整が難しい	16	5.7
押さえつけて無理やり投与・服用させている	16	5.7
薬が大きかったり粉薬のため、飲ませるのが大変に感じる	13	4.6
逃げ回る、あばれるなどして投与・服用したい時間帯に投与・服用させることができない	8	2.8
動いたり暴れたりして上手に点眼できない	8	2.8
皮下点滴の準備や投与が負担に感じる	3	1.1
その他(噛んでいけない薬を噛む、塗り薬をなめる、注射薬の投与と管理が負担、脱カプセルした粉末を他剤と混合して簡易懸濁させて投与している)	4	1.5
合計	281	100

(187件の回答のうち延べ件数)

用量調節のために錠剤分割や錠剤粉砕、医薬品のカプセル充填を行う必要がある例が2割程度あった(図4)。不均等分割による意図しない投与量の誤差や、安全面・衛生面の懸念が生じる。そこで、地域薬局が動物病院と連携し、投与剤形や投与経路の変更、嗜好性の高いフレーバー添加を行うなどペットの与薬に適した製剤設計や最適な調剤方法を検討・実施すること

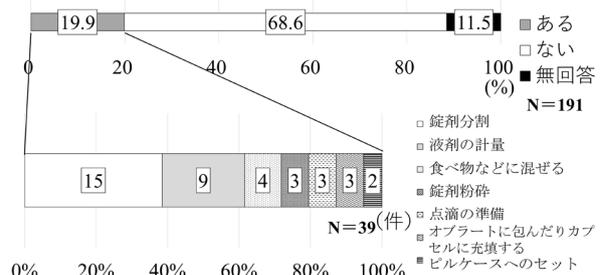


図4 医薬品与薬前の事前作業の有無とその内容

は、飼い主の与薬にかかる負担と家庭動物の服薬時のストレス軽減、ひいては適切な薬物療法の実践につながると思われる。

3.3 飼い主の医薬品情報管理と薬剤師の役割

お薬手帳の使用率は18.3% (図5a)、薬剤情報提供文書の配布率は20.9% (図5b)と低く、多くの飼い主が医薬品の使用履歴を十分に管理できていなかった。また、「薬剤師に相談したい」、「薬剤師から薬の説明を受けたい」との意見が一定数あり、家庭動物の医薬品に関する情報提供の必要性が示された (表4)。適切な薬学的管理は伴侶動物の健康維持に寄与できる可能性がある⁷⁾ことから、地域薬局や薬剤師が飼い主に対して医薬品情報を提供し、副作用や使用上の注意点等に関する飼育者の理解を深めることで、医薬品の適正使用を推進できると考える。

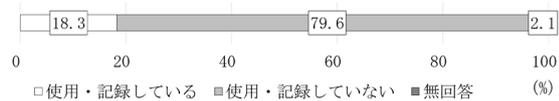


図5a お薬手帳の使用・記録の有無

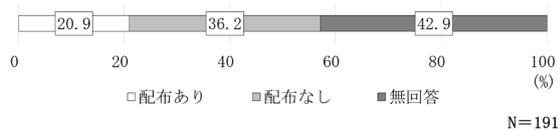


図5b 医薬品情報提供文書の配布状況

表4 家庭動物に関する薬剤師や地域薬局への期待

内容	回答数 (件)	割合 (%)
なし	83	34.3
経済的負担が大きいので薬剤費が少しでも安くなってほしい	80	33.1
動物病院において薬に関する説明は薬剤師から受けたい	24	9.9
薬剤師も獣医療スタッフの一員として獣医療の質の向上に寄与してほしい	17	7.0
ペット用の市販薬を薬局でも購入したい	15	6.2
薬に関することは薬剤師に相談したい	10	4.2
獣医師から処方された医薬品を薬局でもらいたい	9	3.7
お薬手帳や医薬品情報提供文書を発行してほしい	2	0.8
その他 (後発医薬品がペットにももっと使用されてほしい、災害時などの緊急時に薬局で薬をもらいたい)	2	0.8
合計	185	

(174件の回答のうち延べ件数)

4. 結論

本研究により、家庭動物の医薬品管理と服薬状況の実態が明らかになった。医薬品の保管は概ね適切であったが、約4割の飼い主が家庭動物への与薬に苦労していた。動物病院と地域薬局が連携し、薬剤師が適切な薬学的支援を行うことで、家庭動物の健康管理と適正な飼養環境の確保につながることが期待される。

5. 引用文献

1. 獣医療を提供する体制の整備を図るための基本方針, 農林水産省, 2020年5月,

<<https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/tikusui/attach/pdf/200527.pdf>> (最終閲覧日: 2025年3月5日)

2. 愛玩動物看護師法, 令和元年法律第50号, (最終閲覧日: 2025年3月5日)
3. 株式会社 BOOLEAN, '日本初となる動物病院の医薬分業モデル 12 薬局', <<https://12pharmacy.co.jp/>> (最終閲覧日: 2025年3月5日)
4. Lee, SuHak, and Jon C Schommer. Medication Use and Storage, and Their Potential Risks in US Households. *Pharmacy*, **10**(1), 27 (2022).
5. Kelly F. *et.al.*, You don't throw these things out: an exploration of medicines retention and disposal practices in Australian homes. *BMC public health*, **18**(1), 1026 (2018).
6. Konno, T. *et.al.*, Current Situation for Pharmacists in Japanese Veterinary Medicine: Exploring the Pharmaceutical Needs and Challenges of Veterinary Staff to Facilitate Collaborative Veterinary Care. *Pharmacy*, **12**(6), 179 (2024).
7. Konno T. *et.al.*, Insights into Current Veterinary Pharmaceuticals for Companion Animals in Japan: A Study Based on Data from the Veterinary Drug Side Effect Database. *Biol Pharm Bull.*, **45**(9), 1225-1231 (2022).

6. 謝辞

本研究の実施にあたり、回答にご協力いただいた飼い主の方々に心より御礼申し上げます。説明・同意文書の配布にご協力いただいた動物医療センターもりやま犬と猫の病院 大塚 登志喜先生、苅谷動物病院グループ市川総合病院 園部 俊輔先生、ペテモ動物病院 宇埜 可南子先生はじめ、スタッフの皆様に御礼申し上げます。

7. 本研究成果の公表

本研究成果の一部は、学会で発表した。

【演題番号: 29PA-420】

家庭における伴侶動物用医薬品の管理と与薬状況の調査—獣医療薬学への端緒として—
金野太亮、星野百合亜、鈴木裕之、菊池大輔、西川陽介、木皿重樹、中村仁、村井ユリ子
日本薬学会第145年会(福岡)2025年3月29日

(本研究成果は学術専門誌へ投稿中)